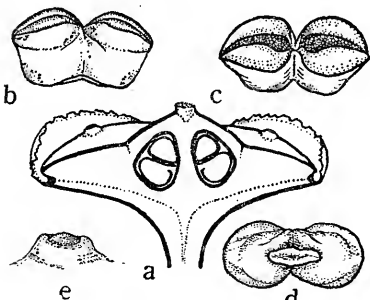


○ヒゼンマユミの花 (原 寛) Hiroshi HARA: Flowers of *Euonymus Chiba*. Makino

肥前諫早城山で発見命名されたヒゼンマユミ (*Euonymus Chibai* Makino) は、その後九州では所々に見出され、果枝は図解もされているが、花については記載がなく、牧野、中井、Blakelock、大井の諸博士は何れも花を見ていない。そこで昨春外山三郎氏に御願して諫早で花を採つて (5 月 29 日) 送つて戴いたのでここに記録しておきたい。



*Euonymus Chibai* Makino a. Longitudinal section of flower petals removed  $\times$  ca. 13. b. Anther with connective, side view  $\times$  20. c. Ditto, seen from obliquely above  $\times$  20. d. Ditto, seen from below  $\times$  20. e. Insertion of anther  $\times$  20.

花 (表紙のカット参照) はかなり濃い黄緑色で、径 8 mm 内外あり 4 数性、萼は径 3.5–5 mm、裂片は扁円形で縁に点状突起がある。花弁は卵円形で長さ (2.5) 3–3.5 (4) mm、縁辺に微細な歯牙がある。花盤は径 3–4 mm でごく浅く 4 裂し、肉質で隆起し黄緑色、雄蕊のつく所の周囲はやや盛り上っている。雄蕊はほとんど無柄、葯隔はよく発達し肉質塊状で灰色、その上に葯が水平にのり、葯は 2 室で淡黄色、頂で上向に裂開する。子房の先端は花盤の中央に山形に隆起し、柱頭は無柄で緑色である。なお子房は 4 室で、1 室に 4 胚珠がはいっていることが多い。広義のニシキギ属 (マユミ属) の分類には花、殊に雄蕊の性

質が用いられ、属が細分されることもある。中井博士 (1941 & 44) はヒゼンマユミをマサキ節にいたがそれは花が分らなかったためで、マサキ類では花糸が長く葯隔の発達悪く葯室は 2 個で側開又は側内開する。しかし 1952 年には理由はあげてないがマサキ類から離して狭義の *Euonymus* に残してある。Loesener (1942) の分類では雄蕊の性質は考慮されず、常緑で 4 数性の花をもつたものは Sect. *Orientalis* にはいるが、ここには色々異質な種が含まれている。Blakelock (1951) がヒゼンマユミを Ser. *Myrianthi* にいたしたのは妥当である。彼の論文は日本産の他の種類の取扱いについては不十分な点が多いが、流石に属全体を広く知っているので、花を見ないでもヒゼンマユミは適当な位置におかれている。

□本田正次著改訂日本植物名彙の出版 戦前に三省堂から出ていた本書が改訂の上出版されたのは喜ばしい。

体裁、組版はもとと同じ、変つたところは戦後の日本の地域だけになつたこと、栽培及帰化植物は除き自生植物相を示したこと、10 数年たつたので学名が大幅改竄されたこと、著者の前著日本種子植物分類大綱の様に科が細かく扱われていることなどである。

本文 389 頁、索引 126 頁、昭和 32 年 3 月、恒星社厚生閣発行、定価 800 円、5 月末まで特価 750 円。(前 川)